まる福連携2021

福祉分野からみた異業種との対話　□連載4□

一般社団法人福祉システム北海道
高橋 銀司代表理事

NPO法人みちロコＩＴプロジェクト代表・ＩＴ技術者 渋谷　幸信氏

しぶや・ゆきのぶ　1972年、函館市出身。92年、映像・プレゼンテーション企画制作会社に入社。その後、医療法人企画調整業務に転職し病院、介護施設の新規設立等に携わる。ＩＴ技術者養成校運営・講師などを経て2012年、求職者に対してＩＴ・コンテンツ制作技術者養成とインターンシップ等実践経験の場を提供することを目的に任意団体設立、16年に同団体を法人化し現職。道労働局高齢者就職促進事業介護初任者研修就職支援に従事。20年、自治体・公共団体向け映像制作・配信など事業拡大。

●映像配信事業を始めたきっかけを教えてください。

2020年の春、ある企業から「新型コロナウイルスで困っている」と相談を受けたところがスタートでした。企業としては、集会を実施したいけど、感染予防の観点から今はそれが難しいとのこと。そのため、集まれないのならオンラインでイベント配信できないだろうかという話になりました。私たちも映像配信にそこまで知識があったわけではありませんでしたが、「できることがあるかもしれない」と思いました。私たちは就職支援関連セミナーの講演で地方に行く機会が多かったのですが、新型コロナによってその仕事が一切なくなっていたところでしたし、困っている人も大勢いる状態でしたので、「挑戦してみよう」と始めました。配信機材調達などの問題もありましたが、何とかやり繰りして、徐々に下地をつくってきたという感じです。

●就職支援セミナーも開催されているのですね。

求職者が就職できるよう、情報や技術を提供して就職を後押しするというのが１つのコンセプトです。ＩＴ、デザイン系などの分野は実務経験がなければ、転職ハードルが高いのですが、逆に経験があるとすごく行きやすくなるという事情があります。現在は他分野でもオーダーを受ければ、講師ネットワークを駆使してさまざまな分野の就職を支援しています。20年は企業と連携してシニア世代で介護職を目指す方向けに、初任者研修を受けてもらった上で就職もマッチングするプロジェクトに携わりました。ＩＴ系だけではなく、履歴書の書き方や面接指導など就職に関するさまざまな面をサポートしています。

●こういう機器を好きになったきっかけは何ですか。

社会人になるまではパソコンのマウスすら触れないくらい機械音痴でしたが、20代前半に入った会社がコンピューターを使ってスライドフィルムをつくる会社でした。医療系の先生方が学会資料を用意するのに、いまはパワーポイントでプロジェクト投影しますが、当時はコンピューターでスライドをつくり、撮影機にデータを入れて、という仕事がありました。その会社に入ったため、夜も寝ずに業務について勉強していました。その後も、物をつくるだけではなくなり、心臓外科等の先生から学会資料用レントゲンフィルムを渡され、それをスキャンして色の調整をしてコンピューターでレイアウトして撮影したりしました。レントゲンは白黒の濃淡で表しているため、光の強さの加減で色がつぶれたり、光りすぎたりします。当時は学会に出る先生に、「この病巣のどこが写っていてほしいんですか」と聞いたら、「ただ機械的に作業するだけではないんだね」と凄(すご)く褒めていただいたのが印象に残っていて、「もっとその要求に応えたい」という気持ちが強くなっていました。それから画像調整ソフトについて凄く勉強するようになり、そのうちフィルムメーカーやプリントメーカー、写真館の方も画像調整ソフトのシステムなどについて会社に聞きに来るようになったり、自分がレクチャーしに行ったりしました。「自分が覚えたことが人の役に立っているんだ」と初めて感じた瞬間だったかもしれないです。その時に、「機械をただ操作するだけではなくて、手探りでも効率的に使える方法を考え、問題解決につなげていきたい」と強く感じられたのがきっかけでした。

●それからずっとＩＴに関連した仕事をされているんですね。

最初の会社はフィルムの時代が終わったこともあり、知り合いの医療関係の方から声をかけられて病院へ転職しました。最初は部署への配属ではなく、確か副院長直轄の医局付きでした。半年間は仕事を「自由にしていいよ」と言われ、院長からも「病院に来たんだから病気のことをまず全部知ったらどうだい」と言われました。毎日午前中はレントゲンの勉強、夕方は薬局の手伝い、夜は22時過ぎに急患室の手伝いに行き、手術も年間100例から150例くらい手術室に入って見学させていただき、病院生活にどっぷり漬かっていました。ＩＴのほかにも、院内の業務マニュアルをつくったりもしました。経営再建のために町立病院を民間に移管させて新たに建て直すというプロジェクトもしました。介護分野であれば、道内で初めて全室ユニットケアにした老健に関わっていましたね。

●仕事をするうえで大切にしていることを教えてください。

お客さんにはコストとデメリットをきちんと話すようにしています。「この金額であれば、これができますけど、それはできませんよ」といったようにかなり詳細にです。あいまいなまま仕事を進めていくと、お互いが不幸になります。例えば、ホームページ制作はどこまでの範囲をつくっていくのか、非常にあいまいになりがちです。商品販売サイトの場合でいうと、商品の出品登録はこちらが最初に10品ほど設定して、あとは依頼主が行う約束になっていても、先方担当者が使い方を覚えるために、予定日数以上に時間がかかってしまったら、その分の費用はどうするのかなど、何となく進めていくといろいろな部分で漏れが出てしまいます。

●配信のためにさまざまな機材が必要になるのですね。

講師の方が１人で講演されている場合など、やろうと思えばノートパソコン１台でできます。ですが、例えばお客さんを100人、200人呼んでいるのに、トラブルで配信が止まってしまうなど、必ずリスクがあります。全国津々浦々からオンラインで人が集まり、何人かでディスカッションやミーティングしたり、さらにそこに参加者を入れたり、複合技になってくるとハウリング問題が起きて、音の管理が凄く大変です。そのため基本的に放送中は常に音を検証しながら管理していきます。

●今の仕事をしていて介護、福祉を感じるときはありますか。

ＩＴは年齢に関係なく、困っている人にこそ必要な技術だと思います。例えば、スーパーまで遠い場所に住んでいるような高齢者の方たちは、ネット通販をできるようになった方が良いと思います。足腰の不自由な方であれば、遠くまでお店に行って、重たい米、水を持って帰ってくるのは難しいと思います。ネット通販できれば、必要なものを選んで、業者が自宅まで運んでくれる。産休中の女性も苦労されている方もいると思います。困っている人にこそＩＴ技術があったら良いのに、そういう方たちはＩＴについても詳しくない場合が多いですよね。そうした方たちのために課題解決の技術、知識を提供したいのです。ほかにも、新型コロナの状況で、家族が施設へ面会に行けないのであれば、パソコン１台、タブレット１台入れたら晩ご飯の時間でも一緒にご飯を食べられますよね。そういう関わりができればいいなと思っています。アナログの限界をＩＴが補えば、案外簡単に実現させたいことに近づけたりします。医療・介護分野に関わっていただけに、ＩＴを使って何か問題を解決して恩返しできないかなと考えています。

配信機材のチェックをする渋谷代表

カメラ操作を教わる高橋氏

■あとがき：髙橋銀司

新型コロナ流行でＩＴ化が加速し、リモートワーク、オンライン会議が一気に普及しました。福祉、介護分野でもその影響を受け、家族等の面会もオンライン対応になったことは全国ニュースでも取り上げられました。中にはオンライン整備ができずに現在も面会できない状態の施設もある一方、家族ら面会者が施設や病院まで足を運べば、ロビーなどで居室につなぎ画面越しに顔を合わせながら会話できる施設もあります。コロナ禍になりオンラインが急速に普及した現在、ＩＴ関連知識は欠かせないものになってきているのではないでしょうか。「機械をただ操作するだけではなくて、手探りでも効率的に使える方法を考え、問題解決につなげていきたい」。そうしたノウハウを教えたり、時には課題解決を目指して一緒に頭を悩ませたり、ＩＴ技術者として異業種に寄り添う姿がとても心強いと感じました。